

仏教学の可能性

織 田 顕 祐

一 「仏教」という言葉について

今日は仏教学会を代表して、諸君を歓迎する意味で話したいと思っています。余り緊張しないで、自由に聴いていただければいいと思っています。

今日は「仏教学の可能性」という題を出しました。五つほどポイントを立てて、私の考えていることが出来るだけ君たちに伝わるように、精一杯努力をしてみたいと思っています。

僕自身も今から三十数年前、諸君と同じように仏教学科に入りました。四年で卒業して、卒業したら故郷の愛知県に帰ろうと思っていましたので、三十年も京都に在ることになるとは思ってもみませんでした。高校を卒業して、いろいろと悩みもあり、自分の人生を考えてみようかと大谷大学に来たのですが、入学してみると驚くことが多くて、その驚きの先に何があるのかと、考えたり学んだり、友人と話したり先生の話を聞いたりしているうちに、気がついたらこんな白髪頭になっていました。皆さんに向かつてお話しするような立場になってしまい、自分でもとまどっているところですよ。

僕自身は、明確な宗教的な動機をもって、大谷大学に入学したわけではありませんでした。仏教が良く分らないからいっぺん学んでみようと思ったにすぎません。僕はたまたま寺に生まれて、寺とか仏教というものが嫌で嫌で仕方がありませんでした。しかし、ある事がきっかけとなって、自分が嫌がっているものの正体も良く分らないで、感覚だけで嫌っていても自分の責任は果たせないのではないかと思って、相手がどんなものか知らなくてはいけないと思って、大谷大学に来たわけです。ですから自分がどういう事を学ぶのかとか、仏教がどういう事なのか分かって入ってきたわけではなかったんです。

どうしてこんな事を言い出したのか、その理由から始めたいと思います。諸君は去年は高校生だったですね。大谷大学ではオープン・キャンパスを実施しています。そこで学科の説明をする必要があつて、学科相談コーナーに座っていると、高校生諸君が来てくれて、仏教学というのは何をやるのですかと尋ねるわけです。大谷大学の仏教学科に入ったら、お経を読む練習をするのですかとか、滝に打たれて修行でもするのですかと、とよく聞かれました。大谷大学は決して滝に打たれたりするような修行をするところではありませんが、仏教という言葉がとても広い意味をもっているのとあらためて教えられたわけです。同じことを大学でも感じます。今、大学では「人間学Ⅰ」という授業があり、この授業のテーマが「仏教と現代」です。諸君も今受けているこの「仏教と現代」というテーマで授業をするときに、仏教という言葉を初めて聞いた人はいますかと訊いたら、そういう人は一人もいないのです。では、仏教という言葉にどういう感じを持っていますかと訊くと、これは、十人に訊けば、十人とも違う答えが返ってきます。ある人は、仏教というのはお寺があつてお坊さんがいてお経を読むことだと答えるし、別の人は仏教というのは歴史が古いもので、何かはよく分からないけれども、重要なものがあるのではないかと答える。このように随分幅があるわけです。毎年、同じ事を訊くのですが、毎年同じ事を感じます。皆さんが学ぶ相手である仏教という言葉には極めて大きな幅があると思うのです。ある人は仏教と聞くと、お坊さんがいてお寺があつてお経を読んでいると思うから、そ

の延長で大谷大学の仏教学科ではお経を読む練習をするんですかと聞いてくれるわけです。また、作家の五木寛之さんのように、人間の心の問題を仏教を通して語っておられるということがありますから、仏教と聞くと人間の内面を明らかにするようなものではないかと考えている人もある。随分幅があるわけです。ですから、まず初めに皆さんに「仏教学の可能性」という話をするにあたって、こうした現実から始めなければならぬと思ったわけです。

今日では、仏教という言葉は、さつき僕が例を出してお話したようにとても広い意味を持っている。広い意味を持っているということは言葉の歴史が古いということもありますし、それから大きなもののある一部分を捉えて仏教と考えるという面もあると思います。だから仏教という言葉を開くといろいろなイメージがあつて、よく使われている割には、かちつと共通の理解でもって語ることが出来なくなっているような面があるのではないかと思うのです。ですから、それは一体何故なのだろうかということ、少し考えてみたいと思います。

大谷大学の仏教学科は、長い伝統があります。ちょうど今、この響流館の一階の博物館で歴代学長の肖像画の展覧会をやっていますが、あそこに掲げられている先生方はみな仏教に深く関わつて来られた先生方です。そして、明治以降の仏教研究の先頭を走つて来られた先生方なのです。そういう意味では大谷大学は、日本の、ということは世界のことでもいいわけですが、仏教研究の先頭を走っている大学であると言えます。これまでもそうであつたし、これからもそうでありたいというところに私たちは立っているわけです。その私達が自分の立っている仏教学がどういふものであるかということがよく分からないままではいけないし、そこにどういふ未来があるかということも理解しなくてはいけないから、「仏教学の可能性」ということで話をしてみたいと思つたわけです。

二 仏教のハード面とソフト面

次に仏教という言葉がとても広い意味を持つているのは何故なのかということ、考えてみたいと思います。資料

に、仏教のハード面とソフト面と書きました。耳慣れない言葉かも知れませんが、ハードとソフトというのは主にコンピュータ用語だと思いますが、そのイメージがうまく掴めるでしょうか。例えばコンピュータには、機械の部分がありませんね。画面があつてその中に電子部品が入っているという、その機械の部分がハード面です。そしてその機械の中にワープロソフトなどが入っています。キーボードを叩くというのは機械的な作業ですから、これはハード面です。しかし、その機械的な作業を通して自分の言いたいことを表現したり、書いたりするわけです。そのために機械と人間を結ぶような仕組みがあるでしょう。自分の心を表現したり、文章を書いたりする、そういうところをソフト面と言うわけです。ですからコンピュータは、機械だけあつてもソフトが無ければ使い物になりません。それから何か表現したいと思つても、機械が無ければまた表現することができません。機械が難しければ、例えば鉛筆でもいいと思います。鉛筆というのは物ですね。これはハードです。だけど、鉛筆を持つて自分が書きたいことを書いていけば、これはソフト面になっていくわけです。ですからハード面とソフト面とは、人間の行動のあらゆる場面にそういうことがあるのではないかと思うのです。衣・食・住、すべてが物によつて成り立っている。その物を通して私たちは生きていくことができ、考えたり、自己表現したりするわけです。だから私たちが生きているということは、ハード面とソフト面によつて成り立っていると言つてもいいと思うんですね。それ故、仏教学というものを一度そういうふうに見てみることはできないかと思つたわけです。

仏教学のハード面というのは、簡単に言うなら、目に見えるような仏教の事柄と考えてみたいと思います。例えばこれから皆さんが学んでいくであろう、経典とか様ざまな本といった、いわゆる文献ですね。文献という言葉はとも堅いけれども、本とかお経と考えたらいいと思います。そういうことを「演習Ⅰ」で少しずつ学び始めていると思いますが、目に見えるお経とか本などが学ぶ対象として一つ存在します。それからそういう文献だけではなくて、資料には歴史と書いておきましたけれども、仏教の長い歴史があります。そういうものも一応形のあるものですね。

それから仏教の文化があります。さきほど仏教というのを思い出すかと言ったときに、お寺があつてお坊さんがいてお経を読んで、おじいちゃんが亡くなった日に葬式をやることを指すのだと感じる人は、この文化的な面を見たわけですね。仏教というのはとても大事なものだ、なぜなら長い歴史があるからと考える人は、仏教がインドで始まつて、二千五百年という長い歴史を持つていてどこかで学んだのですね。だから仏教の長い歴史を見て、何か分らないけれども、大事なものではないかと思つたのでしょうか。仏教というと、お経を思い出すという人もいました。そういう人は、お坊さんがお経を読む事を知つていて、仏教といえばお経というイメージだと考えたわけです。このように私たちは、目に見える物を通しての事を知つていくわけですから、仏教のハード面ということで、大きく文献、歴史、文化の三つに整理してみました。

そして目にみえるものというのは必ず人間が造りだしたものです。先ほどもいいましたように、例えば經典ならば、誰かが鉛筆を持つて自分の心をかきあらわしたものだと言えるでしょう。それから歴史なら、多くの人間が歩んできた、その全体を歴史と言うわけですね。それからお寺でも、仏像でも、どうしてああいう物ができたのでしょうか。去年、仏教学会で奈良に史跡踏査に行きました。奈良の東大寺には大仏様という非常に大きな仏像がある。あの仏は今僕たちが見ると、とても大きな仏像だけれども、あれを造つた人がいる。造つた人は一体どういう気持ちで造つたんだろうか。何かを造るといふのは自分の内面を表現することだと思つたのです。僕たちはその表現された物、仏像という出来たものを見るから、大きいとか奇麗だとか幾らくらいするんだろうとか、そういうことしか考えません。しかし、造る方から言えば、きつと自分の大事なものを表現したいと思つたんだろうと思います。何かを表現しようとして、その結果ああいう物が出来たんだと思つたのです。仏像にしてもお寺にしてもあらゆるものはそうだと思うのです。皆さんの中にはお寺出身の人がいるかも知れないけれど、皆さんは既にできあがつたお寺に生まれて、それを造つた人の苦勞は知らないかもしれせん。しかしそれを造るにはものすごく沢山の人が気持ちを

寄せ合つて、それが出来たはずですね。ですから何か目に見えるものが出来るといふことは、お経にしても、歴史にしても寺や仏像にしても、必ずそれを造つた人の心が集まつてそういう形をとつたはずだと僕は思うのです。ここにハード面と書きましたけれども、お経であつたり、歴史であつたり、文化であつたり、そういう目に見えるものは、目に見えない人間の心の表れだと、そんなふうと考えてみるのが出来るのではないかと思うのです。

仏教というのはとても幅の広い言葉だから、それをハード面とソフト面という具合に、一度分けて考えてみたらどうかと思つたわけです。皆さんが今から仏教学科で学んでいくことは、当分ハード面です。これから演習や授業でやることはまずハード面ですね。目に見えないものはいきなり伝えることはできませんから、目に見えるものを通して触れていくしかありません。諸君がこれからまず仏教学科で学んで行くことは、さつき言つたように、文献、歴史、文化、他にもあるかも知れませんが、そういうことが入り口なのだと思います。

仏教学科のコースは、今はインド・中国・チベット・日本と地域によつて分けていますが、例えば文献コースとか、歴史コースとか文化コースという具合に分けてもいいわけです。いずれそういうふうにするかも知れませんが、今は地域を決めて、その中に文献があつて歴史があつて文化があつてと重なつていきますから、今は地域の方から分けていきます。その地域のことを考える時に、目に見えるものとしては、文献や歴史や文化があるという事です。ですからこの入り口としてのハード面は自分が関心の持てるもの、語学が好きな人は文献から入つた方がいいし、歴史が好きな人は歴史的な感覚からやつた方がいいと思うし、文化的な面、例えばお寺や仏像に興味のある人はそこから入つていけばいいと思います。そこから入つて、それを生み出した人の心を探していくといえますか、明らかにしていく、そういう方法があるんだと思います。

三 目に見えないものを知ることの大切さ

目に見えない人間の心というのは、それを取り出して、はいこうですと人に見せるわけにはいきません。それ故、目に見えるような姿となったものの中にそれを感じていくしか方法がないと思います。それで仏教学のハード面とソフト面と分けてみました。しかし、教室や授業で出来ることは、まずはハード面です。けれどもハード面だけでは不十分です。コンピューターでもそうでしょう。画面がどういふものかとか、キーボードが何個あるかとか、何処を叩いたらどうなるかとか、そういうことはコンピューターを作る人には必要だけれども、コンピューターを使う人はそこまで知らなくてもいいと思うのです。使うことの方が大切なことから。作る人はハード面を知らなくてはいけないけれども、使うことで自分を表現しようとしている人は、まずは使い方を知ることが大事ですね。ソフト面が大事だと思ふんです。いくらコンピューターの部品の事を知っていても表現したいことが無ければ、キーボード打つ必要ありません。ハード面とソフト面は切っても切れない関係にあります。ソフト面を身につけるためにはハード面が必要だけれども、そのハード面だけで仏教学というのとは十分かというのと、決してそうは言えない面があるということです。

何故、こういう事を問題にするのか話してみようと思います。目に見える知識というのは、これまで諸君が、主に小学校や中学校、高校で学んできた国語や社会や算数などの勉強のことです。これは文字に書いてあったり、数字になつていたり、図を覚えたり、そういうものを覚えればよかったです。文字や目に見える図を覚えることがこれまでの主な勉強だったはずですよ。例えば漢字を沢山覚える、文章の書き方を覚える、算数で計算の仕方を覚える、それは何の為かと言えば、自分自身が生きていく上でハード面として必要だからですね。数字のことが何も分からなかつたら今の世の中では生きていきません。今の世の中は買い物一つするにしても、お金を払ってものを買うことで成り立つて

います。衣・食・住、どの場面でもお金は必要です。だから最小限の計算が出来なければ、生きていけません。文字もそうです。漢字やアルファベットやひらがなやカタカナ、こういうものによって世の中の情報は成り立っています。だからそれを知らなければ、生き方がずいぶん限られたものにならざるをえません。だから一人の人間として生きていく上で必要な知識として学校で習って来たわけです。社会と人間の関係とか、歴史のことを学んできたわけです。これらは、知識としてはハード面だと思っすね。つまり漢字を沢山知っている、計算をするのが人より早い、歴史の言葉を沢山覚えた、或いは物理のことをたくさん知ったといったことは知識としてはとても大事なことです。ですからこれまではそういう知識を沢山身につけるために一生懸命勉強しなさいと言われて勉強してきたわけです。そして、その結果として大学生となられたわけです。

では大学というのはどういふところなのでしょう。それはそういう道具の使い方を覚えていく場所であると言えます。難しい言い方かも知れないので、例えてみましょう。例えば、包丁という道具があります。どんなによく切れる包丁でも、包丁が大事ではないのです。包丁を使って魚や野菜を切つて食べるための形にする、つまり、使うということが大事なわけです。だからよく切れることが大事なわけです。よく切れる包丁を眺めているという人がいるかも知れないけれど、そういうことが大事なわけではないです。使うことが大事だと思います。これが僕の考えるハード面とソフト面ということです。だから知識というものにもハード面とソフト面があると思うのです。つまり、皆さんはこれまでに人として生きるために必要最低限の道具として知識を身につけて来たわけです。これは包丁で言う、とてもよく切れる包丁を一本手に入れたようなものではないでしょうか。その良く切れる包丁をそのまま置いておくだけならもったいないです。

そして、知識にハード面とソフト面があると考えると、これまで諸君が、とにかく覚えなさいと言われて身につけた生きる為の道具としての最小限度の知識、つまりハード面の知識とは、具体的には文字や写真や図表などと

いう目に見えるものによって成り立っているのです。ではその知識は一体何の為にあるかと言えば、生きていくための必要なものとさつき言いましたが、この知識を使って自分が人として生きていくための大事なことを考えたり、探したりするためにあるのだと思うんです。これからはその知識の使い方を学んでいくことが大切だと思うのです。これまでに身に付けたハード面としての知識を基礎として、形のない、目には見えない、自分の内面や、自分とはどういうものかと考えたり、明らかにしていくことが大学では大事になっていくのです。

漢字を沢山知っていると、計算が早いとか、物理現象を沢山知っていると、社会の仕組みを良く知っているとか、そういうことが知識としてたくさんあっても、そのことで自分がどう生きるかとか、人生の真実は何かといった大切な問題がただちに明らかになるわけではありません。だから、そういう道具としての知識を使って、人としての生き方とか、人間についての考え方とか、人生の真理とは何かということを明らかにしていくための考え方とか、学び方を身につけていくのがこれからの大学生としての課題だと思ふのです。

四 形式知と暗黙知

僕の考えをもう少し整理して言うと、次のような言葉になるのです。目に見える知識、これを形式知と言うのだそうです。これは目に見える知識だから文字や写真やグラフ、そういうもので成り立っている。私達が普段手に入れる知識とは殆どこういうものですね。これに対して形式知では伝えられないような、目に見えない知識が確かにあります。そういうものを暗黙知と言うのだそうです。暗黙知とは、人間が経験したり人と出会って知るような形の無い知識の事なのだそうです。ある新聞の記事からそういうことを学びました。これまで諸君が教室で学んできた勉強という作業で身につけたものは主に形式知ですね。言葉を覚える、数字を覚える、数字の使い方を理解する。絵やグラフやさまざまな情報という言葉で成り立っている知識ですね。それに対して、決して情報には出来ないような人間の内

面の知識というか、そういう側面があつて、それを暗黙知と言うのだそうです。例えば君たちがクラブ活動などの人間関係から学んだことも多くあると思います。しかしその学んだことは何ですかと聞かれると、あまりはつきりと言葉にはできません。うまく言葉にはならないけれど確かに学んだと言えることがあるでしょう。そういう事を暗黙知と言うのです。

別の例を挙げてみましょう。僕は自転車が好きだから、いつも自転車に乗っています。皆さんは自転車がどういものか知っていますね。自転車を写真に撮る、すると自転車を知らない人にこういうものだと思えることが出来る。そして言葉で説明することもできます。自転車というのは車輪があつて、サドルがあつて、ペダルがあつてと説明することが出来ます。だから、写真で伝えたり、言葉で伝えたり、文字で伝えたりすることが出来ます。しかし、自転車というものを全く知らない人に言葉だけで伝えるのはこれは大変です。写真なら少し分かるかも知れません。だから文字よりは写真、という具合に情報もだんだんと高度になってきました。自転車を知らない人が自転車を知るという例で言えば、以前よりも随分事実に近いといつていいと言えらるのです。僕たちが学生の頃は、今のようにインターネットにはありませんし、コピーも学生が使えるようなものではありませんでした。本を読んだら自分で写すといった方法しか無かつたわけです。だから勉強の仕方でも手を使う勉強でした。それがコピーの時代になったので、コピーを貼り付けてノートを作るといふ時代になりました。今はインターネットになって勉強の仕方は全く変わりました。昔だったら、例えば法隆寺というお寺を知りたいと思つたら、辞書を引くと文章で書いてあるので、それを読んで頭でイメージするしか無いわけです。ところがすこし後の時代になると、辞書の中にも写真が載つていて、『図解日本仏教辞典』のように少し分かりやすくなってきました。今ではインターネットで法隆寺を検索すれば、詳細までカラーで見ることが出来ますし、探訪した人のビデオの画像まで見られます。このように、文字のみの情報よりは確実に事実に近い近づいて来たわけです。だけど、法隆寺に行つて見た人と、コンピューターの中だけで知つている人とは大分違う

と思うんですね。

情報というものはだんだん質が変わってきて、事実に近いように思っているけれども、実はそこに大きな落とし穴があるのではないかと僕は思っているのです。僕の好きな自転車に例えてみると、自転車とは何かと言えば、ハンドルがあつて、ペダルがあつて、車輪があつて漕ぐもののだといった具合に色々説明できます。次に写真を撮つてそれを見せれば、それよりはもう少し良く分かりますね。又ビデオに撮つてそれを見せれば更に良く分かります。しかし、自転車は何の為にあるかという、乗つて走つてどこかに行くためにあるわけです。自転車を飾っておきたいという人も中にはあるかも知れないけれど、走るのが好きだから、好きなものを飾るといのが順序だと思います。そうすると自転車で乗つて走るという、自転車の乗り方が大切だということになります。これを言葉で説明するのは極めて難しいことです。君たちの中には自転車で乗れる人もいますが、自転車の乗り方はどのようにして覚えたかと言うと、これは本を読んで覚えたとか、インターネットで検索した、ということではないでしょう。自転車の乗り方をもし文字で説明しようと思つたらこれは大変です。例えばハンドルの握り方一つでも、文字でこれを説明しようと思つたら、ものすごく大変です。そしてペダルを漕ぐと、バランスが崩れるから、その時に体の重心を数センチ移動して、というようなことを言葉で説明して人に伝えられるでしょうか。少し考えてみてください。もし、自転車の乗り方を言葉で説明せよと言われたら、とても困るのではないのでしょうか。はたしてそんなことが本当に出来るだろうかと思ひます。もしも、自転車を見た事がなくて、言葉だけで知っている人がいたとして、その人にサドルに跨るといふことを説明するだけでも文字のみでは難しいと思ひます。そしてハンドルを持ってペダルを漕ぐのだけれど、知らない人に言葉だけで伝えられるでしょうか。そこに実際に自転車があつて、人と人の間に置いて、そこに跨つてこうやつて漕ぐんだと教えればそれは伝わりやすい。しかし、コンピューターの画面の中だけで、自転車に乗るといふことを本当に伝えられるでしょうか。今は、画面があるから、外見的なことは簡単に伝えられます。し

かし、漕ぐ時にどのようにしてバランスをとるのかとか、ハンドルはどのように操作するのかといったことを言葉で説明しきれぬでしょうか。

どうでもいいことのように思うかも知れませんが、人間の知識には、言葉や画像などで伝えられる面と、そういうものにはならない面があるということです。目に見える知識、これを情報と言います。文字情報であったり、映像情報であったり、これまで諸君が学んで来たような勉強によって身につけることの出来る知識、こういうものを情報と言っておきたいと思えます。それに対して、さつき言ったような自転車の乗り方とか、御飯の食べ方とか、何かの仕方というものはほとんど情報化出来ない知識です。このような情報化出来ないような経験的な知識のことを、暗黙知と言うのだそうです。だから、人間の知識には形式知と暗黙知という二つの知識があると、物事を良く見る人は言っています。

そして今、日本の学校教育の課題として、形式知に片寄すぎていると指摘されています。学校で教えられることは、教室で学ぶ、本を通して学ぶ、情報を通して学ぶ、情報を処理して学ぶ、といった具合に全部形式知です。だから、ハードなら身に付けることは出来るけれども、経験そのものはそれでは伝えられないわけですから、暗黙知のような大切なものがあるという点が随分軽視されているのではないかと言われています。これは僕が勝手に言っているのではなくて、多くの人によって盛んに言われているのです。だからといって形式知は駄目だとか、そんな乱暴な事を言っているわけではありません。形式知は大事だけれども、形のある知識というものは、形の無いものを俟って初めて完成するという意味ですね。ハード面だけでは不十分なのです。

元に戻すと、仏教学というものも、これから諸君が学んでいくのはまず形式知です。文献であったり、歴史であったりという形式知です。そういう形式知を通して、それを生み出してきた人間の心の内面とか精神の探求の歴史とその内容を知って、これまでには見たこともなかったような自分自身の本質を発見していくことが大切だと思うのです。

自転車についての知識を幾ら沢山持つても、それだけでは自転車の乗り方は分からないものです。沢山知ることは大事だけれども、沢山知るだけでは自転車に乗れるようにはならないということを、どこかではつきりと知る必要があります。自転車の仕組みを詳しく知るよりも、自転車に乗ってどこかへでかける事の方が楽しそうだとは思いませんか。

諸君は、今まで目に見える知識を沢山身につけてきました。これからはその目に見える知識を通して目に見えない自分の内面とか、社会の仕組みとか、生き方とか考え方を学んでいく必要があると思うのです。目に見える面と見えない面という仏教学の両面が、現代の中でどういう視野を開き、どういう道を開いて行くかということを中心に少し考えて見たいと思います。

五 仏教学の可能性

グローバル化と書きましたが、現代ではインターネットなどが普及して世界が瞬時につながるようになってきました。それで、グローバル化ということは内容的にはどういう事かを考えてみたいと思います。すると次の二つの課題がただちに浮んできます。一つは情報化という問題です。情報化にもなつて世界中がつながるようになっていけば、自分たちの文化とは違う文化に出遇っていくことになります。異文化と言いますが、そういうものに当然出遇っていくようになります。これが二つめです。だから、諸君が生きて行くであろうこれからの世の中を情報化と異文化という二つの問題に限って考えてみましょう。まず、情報化はこれからもどんどん進んで行くでしょう。それ故、その中で決して情報にはならない暗黙知という領域があることをどこかできちんと学び、人にも伝えていけるような面が必ず必要ですね。人間は情報だけで成り立っているわけではないのだ、情報は人間が使うものなのだということをはっきり自覚するということです。これは仏教学のハード面を通して、内面を探っていくという学び方が大いに参考にな

るはずです。

それから人間の内面と書きましたが、心のあり方と言えば良いのでしょうか。この面は仏教が二千五百年に亘って研究してきた内容です。今の世の中には様々な問題があります。個人の問題、家庭の問題、地域の問題、社会の問題、学校の問題などいろいろあります。社会の問題というのは自然におこるわけではありません。誰が起すのかというと必ず人間が起すのです。だから社会の問題は人間の問題だと思っんですね。だから人間の問題を考える、人間の内面を考える、こういうことが社会の問題を考えていく為の糸口というか、切り口になるはずで、自分自身の問題も含めて、家族の問題、社会の問題、地域の問題、などいろいろのことを諸君は感じていると思います。そういうことを考えていく時のきっかけ、手がかりとは、誰がそういう問題を起すのかということ。それは必ず一人一人の私達ですから、私の内側を学ぶ、そういう目を持つてることが大事なのです。これが仏教学のソフト面ということなのです。仏教は一貫してそういうことを考えてきた。しかし、それは目には見えません。それ故、ハードを通して学ぶ必要がある。経典を通して人間の内面を学ぶ、こういう事が仏教学に依って可能になるわけです。お経という形のあるものを通して世の中を考える、社会を考える、地域を考える、こういうことが出来るようになるわけです。

次にこれから日本は益々、他国に対して国を開いて行く必要があるでしょう。少子高齢社会ですから必然的に開いていかなければならない。現にそうなりつつあるそうですね。すると必ず、日本の文化以外の文化と私達は出遇っていかねばならない。その時に異文化を理解していくというか、交流していくというか、理解はなかなか出来ないかもしれませんが、共に生きていくための視点が必ず必要になります。もともと仏教の歴史とは、中国から見ればインドの文化ですし、日本から見れば中国の文化ですから、日本の仏教も、中国の仏教も異文化交流の成果と見る事ができます。そもそも、釈尊の思想がインドの伝統文化から見れば一種の異文化です。だからもともと異なる文化を

受け入れて、そしてそれを自分たちのものにして、伝わってきたという歴史を持っています。文化と文化が出遇って、摩擦を起こすとか、問題を起こすとか、課題が生まれるとか、そういうことの延々とした歴史です。そして、その中で一度も仏教の方から戦争を起こしたことはないというのも事実ですね。これから世界がますます交流していく時に、人と人が共に生きていくということがどうしたら実現できるのか、こんな視点が益々必要になっていきます。これには英語を覚えるといったハード面も勿論必要だけでも、人間というものを深く理解する、その上でお互いが理解し合っていくということが必要になっていくはずですね。道具としてのハード面と、そのハード面を通して見えないものを良く知っていくという両面が必要になっていくと思います。

これから諸君が生きていく世の中に向かって、仏教学の持っている本質が、どういう道を開いていくかという点については、前途洋々たるものがあるといつていいと僕は思います。文字や画像という目に見える形式知を通して、暗黙知という形にならない智慧があり、その形にならない智慧が人間にとっては本当に大切なものなのだということが仏教を通して知る、これがまず一つ大きな課題ですね。そういうことが情報化の中で大事な問題を提示していくであろうし、人間の内面を深く見つめることは、異文化を生きていく時に大事な基盤になっていくと思うのです。こういうことを思うものですから、「仏教学の可能性」という題を出したわけです。僕自身は今からそんなに新しいことが出来るとは思いませんが、これから学びを始める諸君には僕にはもう出来ないようなことを大いにやって貰いたいと思います。僕には思うことはあるけれども、やれることは少ないので、大いに諸君に期待しています。仏教学を学んでいくことにはこういう意味があつて、それが未来を開いていくのだということを今日は諸君に聞いて貰いたかつたということですよ。

うまく伝わったかどうか分かりませんが、これから一学年、二学年、三学年とハード面の勉強がだんだん深まっていきます。そのハード面の勉強は、必ずそれを作った人があつて、そこには作った人の心が表現されているというこ

とをどこかで感じながら、学んでいってほしいと思うわけです。

「仏教学の可能性」ということで諸君に考えを聞いて貰って、諸君に大いに期待したいというのが、今日の話の内容です。どうもありがとうございました。

(本稿は、二〇〇七年四月二十日(金)にメディアアホールで行われた講演を加筆訂正したものである。)